

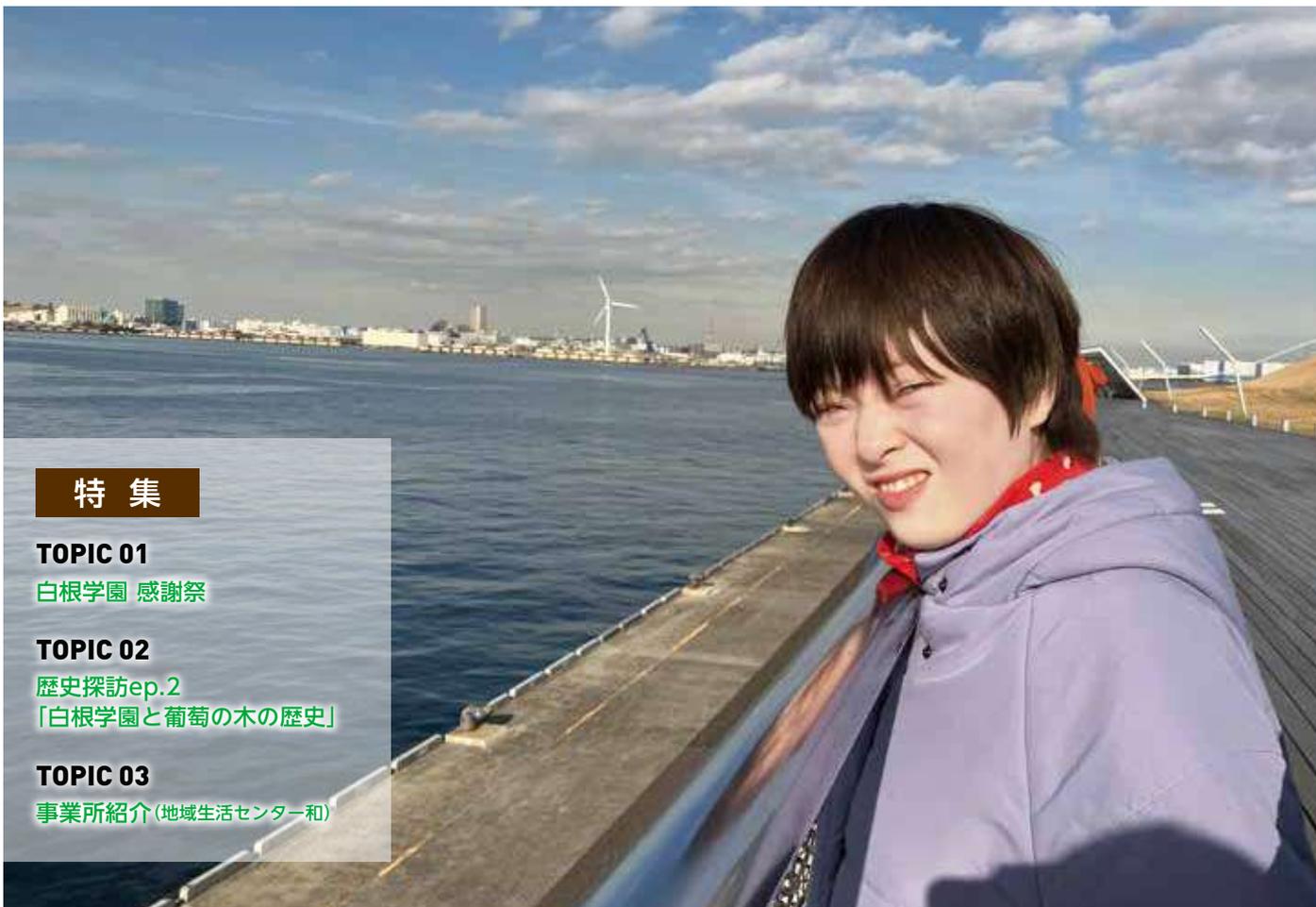


SHIRANE

発行/社会福祉法人白根学園 発行責任者/三木 健太
住所/横浜市旭区白根7-10-6 TEL.045-951-2669 FAX.045-951-7773



Homepage



特集

TOPIC 01

白根学園 感謝祭

TOPIC 02

歴史探訪ep.2
「白根学園と葡萄の木の歴史」

TOPIC 03

事業所紹介(地域生活センター和)



目次

- ・ 学園長挨拶②
- ・ 研修報告③
- ・ 行事(白根学園 感謝祭).....④
- ・ 歴史探訪⑤
- ・ 職員エッセイ.....⑥
- ・ 事業所紹介⑦
- ・ まちがい探し/編集後記⑧

新しい時間をはじめのために

2025年2月
学園長：飯山 文子

あけましておめでとうございます、とご挨拶をするには時間が経ちすぎてしまいましたが、皆さんはどんな年末年始を過ごされましたか？そしてこの広報がお手元に届くころは年度替わりの時期に当たり、1年のまとめや新年度の準備等慌ただしい気分の中で過ごされている方も多いのではないのでしょうか。

さて、昨年秋発行の広報誌で拠点再編プロジェクトや、新人事考課制度が始まることについて触れました。いよいよ4月からグループホーム(以下GH)の運営が新拠点の下で始まります。GH再編の目的の一つに、拠点ごとに支援の方向性や専門性を特化していく、ということがありました。今回この過程で、法人全体の中でそれぞれのGHをどう位置付けていくかということ、自分が管理するGH以外のGHの状況についても「自分事」として考えながら意見交換を重ねてきたことで生まれた、施設長たちの意識の変化が、もう一つの大きな成果でした。現在白根学園の運営は、拠点ごとの独立採算制が基本です。勿論施設長ですから自分の拠点の採算を含めた運営には、責任を持たなければなりません。それが行き過ぎると、自分こそがすべてを分かっている、とばかりに独善的になりかけ、他の拠点からするとよく分からないから言わないでおこう、と他拠点のことは自分事として考えなくなるという、危うい管理職集団になりかねない側面を持っています。今回の施設長たちに生れた意識の変化は、これから法人内の大多数の利用者さんと職員が関係することになる日中活動の事業の再編の核心部分の話を進めて行く際に大きく作用していくと思います。

また2年かけて準備をしてきた新人事考課制度も、今年度後半は実際の考課表を試用しながら微調整を繰り返し、いよいよ4月から運用が始まります。現在の人事考課制度を導入することを決めてから約20年、導入当初の目的は一定程度達成できたと思っておりますが、この間、白根学園の規模は飛躍的に大きくなり、障害福祉の制度や社会情勢も大きく変わり、小手先の調整では対応しきれなくなってきていたために、人事考課制度を刷新することに決めました。これまで使い慣れた人事考課表と、似て非なるものなので、始めのうちは混乱すると思います。が、まずは使いながら微

調整をかけ、私たち自身の手で新人事考課制度を育て、私たち自身も白根学園の職員として更に成長していきたいと思っているところです。

このほかにも、今年度、芹が谷やまゆり園を含む白根学園内各署で、これまで65年の歴史の中で培ってきた、大切なものを守り、次世代につなげていくために、あちこちで色々なことに取り組みました。勿論、全く新しい取り組みにも挑戦しました。空回りだったもの、思ったような結果につながらなかったもの、今回は失敗だったもの、まだ結果にはつながっていないもの、大成功だったもの、等々、様々な振り返りを基に、次はどんな知恵を絞って何をどうしたら良いのか、各部署で次年度に向けて色々画策しているところ、多分画策しているはずですよ。

新しい時間をはじめのために、来し方行く末を十分吟味して、次の一步を踏み出したいと考えています。各署でもそうできるように後押しをしたいと思っています。踏み出したその先に何があるかは、今はわからないけれど、純粋に新しい時間をはじめのための一歩なら、必ず次につながっていくと思っています。

2024年度の残りを穏やかに終えられて、2025年度が颯爽と始められますように。



研修報告

外部研修「関東地区知的障害者福祉関係職員研究大会」 光の丘：百武 悠奈

令和6年7月5日に関東地区知的障害者福祉関係職員研究大会に参加しました。全体会で公演された「べてるの家」は精神障害などを持つ方々の地域活動拠点として設立されました。講演の中で最も印象に残ったものは「当事者研究」です。当事者研究とは「自分自身で、ともに」を基本理念とし、前例や常識にとらわれずに「困りごと」などを「悩みや問題」としてではなく、「課題」や「テーマ」として前に置き、常に「研究する」という視点で自由に語り合います。当事者研究は「いつでも」「どこでも」「いつまでも」自分のペースとやり方で進めることができる自発的な研究活動で、研究の成果を共有しそれを実生活に活かし、仲間と分かち合うことを大切にしています。リモートで参加された「べてるの家」の方たちがそれぞれの課題やテーマを話しており、「自分は〇〇だから、がんばらないといけない」「〇〇したいから、がんばりたい」など、自身の課題について真剣に「研究」していました。課題については「べてるの家」の利用者さんだけでなく職員も課題を共有しており、職員は研究を手伝うだけではなく、寄り添い、分かち合うことで当事者自身が課題に取り組めるよう支援しているとの話がありました。

講演を聞き、日々の支援の中で、利用者さんの困りごとについてどれくらい自分が向き合っているのか改めて考えることが出来ました。今後、利用者さんに寄り添いながら、その人自身の困りごとと一緒に研究していきたいと思います。

内部研修「交流研修」

研修委員：児玉 恵里子

白根学園に入職後、同じ事業所内の職員との関わりはあるものの、他事業所との交流などは難しくなっています。そこで、他事業所の仕事内容を知る事や職員の横の繋がりなどが作りづらい状況が懸念される事から、入職1年目の職員を対象に交流研修を実施しています。

交流研修は様々な事業所・バックグラウンドを持つ職員同士が「他事業所の仕事内容」「仕事とプライベートなことなど他愛もない話」「業務上で大変な部分を共有する事」などを話し合います。交流を通して、参加者相互の事を知る事、話をする事で心が軽くなる事、各々が刺激をもらい仕事へ活かしてもらおう、という事が狙いの研修となります。

研修参加者が初対面の場合もあるため、アイスブレイクの時間として、就労のぞみのお菓子を食べながら進めてみたり、対話用カードランプを使用しゲーム性を取り入れるなど和やかな雰囲気での研修が進むように取り組みも進めているところです。またリラックスできる環境も工夫し、会議室ではなく、光の丘ルーチェ、希望サルビア、しらねの里ヴィラージュという法人内の喫茶店で開催しています。

白根学園では交流研修の他にも様々な研修を開催していますので、またの機会にご紹介させて頂けたらと思います。



◆ 白根学園 感謝祭 ◆

来場者数:612人 感謝祭委員長:白川 勇太



風の丘：山岸 詠一

白根学園感謝祭が12月7日(土)に開催されました。天候にも恵まれ、法人内各拠点の利用者さんをはじめ、地域の方々にも多数来場頂きました。

今回、感謝祭へ出店、イベント参加いただいた団体と運営側からお話を伺いました。

《芹が谷やまゆり園・大久保職員より》

芹が谷やまゆり園の出店は昨年に続き2回目となります。主に同愛会の事業所が製作する自主製品を集めたセレクトショップとして販売いたしました。

お子様にはアクセサリーが人気で、利用者さんには、トートバッグやポーチ、クリスマスオブジェなどが人気でした。

やまゆり園の利用者さんも参加し、白根学園の利用者さんとの交流もあり共同運営の良さを感じられる一面でした。

《K-one動流夢(ドリーム) 代表・近藤様より》

K-one動流夢の結成は1999年で“良いよさこい”をテーマに地域や人と人とのつながりをよさこい踊りを通じて伝えていきたいと各地で年間約30ステージを行っています。メンバーの踊りを見てかっこいいとおっしゃっていただいた小学生、一緒に踊られた利用者さんもいらっしやり、熱気に包まれたステージを披露する事ができました。

《感謝祭実行委員長・白川職員より》

冬の最大イベントである感謝祭を実施するにあたり、委員の皆様と会議を重ねていく中で色々な意見を出し合い決めていった内容が、日を追うごとにどんどん形になっていくことに、実行委員長としてのやりがいや喜びを感じました。

また、ご協力いただいた他法人・企業の皆様との打ち合わせなど、自分にとって多くのことを学ばせていただける貴重な機会となり、そのような部分にも個人的には楽しみを感じていました。

実施に当たり、今年度は、新たな取り組みとしてイベント会場を園庭と光の丘4階の2か所に分けて、来場された皆様に屋内外の両方で楽しんでいただけるよう改善しました。

園庭では、参加型のイベント内容を企画、観るだけではなく皆様にもイベンターの方達と一緒に体験していただくことで、会場の一体感を演出しました。

光の丘4階は、カフェのような空間をイメージし、「地域交流スペース」として開放しました。パンやコーヒーなどの軽食を楽しみながら、会場で演奏される美しいピアノの音色を堪能していただける演出を行いました。

飯山学園長のピアノ演奏による空間演出、しらねの里の鈴木香さんとのミニコンサートなど、来場いただいた皆様に素敵な歌声とピアノの音色をお届けすることができました。

ご協力いただきました他法人・各企業の皆様、そしてご協力いただきました多くの方々には、本当に感謝しかございません。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

今回、参加いただいた方々よりお話を伺い、改めて利用者さんや地域の皆様、協力店舗などの結びつきを強く感じました。

また、来年もたくさんの笑顔が溢れる感謝祭であって欲しいと感じる1日となりました。



歴史探訪 ep.2

白根学園と葡萄の木の歴史

ホーム里：今井 賢次郎

今回の歴史探訪は、白根学園の創立期からある葡萄にスポットを当て、歴史を深掘りしました。昭和35年5月、白根学園の「児童寮」（現：ぶどうの実）は、当時、日本の国では障害を持った人に対する福祉や教育という考えがまだまだ少ない時代に設立しました。そのような困難な状況の中、折角生まれた大切な命を大事に守り育て、教育をしながら一人の人として成長してもらいたいという親の願いをこめて作られました。

「児童寮」の前には葡萄の木が植えられ子供達の成長を見守りつつ、葡萄の木は白根学園と月日を共に過ごしてきました。それゆえ、「児童寮」は平成27年10月の名称変更まで長く「ぶどう寮」という愛称で親しまれていました。

ところで、白根学園児童寮の葡萄の木は、どのように植えられたかご存じでしょうか。

創始者の三木信之氏は白根学園創立に伴い、「白根の丘に何か植えたい」と話して、三木医院に通われていた県庁の農政課のヨシムラ様に相談した所、地質検査までやっていただき、この土地は葡萄と柿が適していると教えて下さったそうです。その後に葡萄、柿各々30本を白根の地に植樹しました。当時の子供達の作業は、農業、果樹栽培、養鶏があり、その作業を通して、物を知り数が分かり、社会に関心を持たせたい。健康で豊かな人間になってほしいと願ったそうです。しかし、果樹園の作業は、子供達にとって重労働で、なかなか思うように進められず断念せざる負えなくなり、大果樹園の夢は終わりました。その間に財団法人、社会福祉法人認可の為、利用定員の増員がすすめられ新棟建設があり、植えられていた葡萄は児童寮の前に移動されました。なお、柿はまだ「ぶどうの実」の裏に1本残っています。

当時、児童寮前の葡萄が実った際には、子供達が自らハサミを手に取り、毎年職員含めて全員で、葡萄の収穫やとても甘い葡萄を堪能したとの事です。葡萄の成長や甘みを出す為、肥料として給食からうどんや蕎麦を作るときの出汁を与える事もやっていました。ちなみに、昭和44年からは必ず収穫した葡萄の一房目は、初代理事長の仏壇にお供えていたそうです。初代理事長も天国から眺めながら、子供達や白根学園の成長を喜ばれたのではないのでしょうか。

時は流れ、平成2年5月、「月日が経ち、此の人達の最後の安住の場を」と願い、第二成人寮（現：しらねの里）が白根学園（白根七丁目）から少し離れた上白根町の土地に建てられました。当時の施設長の計らいで、遠く離れても白根学園には創立期からあった葡萄の木があった方がよい、それと栽培しやすく、利用者さんが食べられる実のなる木を植えたいという思いで、葡萄とキュウイが植えられました。葡萄やキュウイは、ここ数年利用者さんは食べられておりませんが、日々一生懸命に育ち、いまでも毎年実を实らせています。

白根学園「児童寮」の葡萄の木は、建て替え時に伐採しましたが、葡萄は白根学園の象徴として、いまでも残っています。知らない方は、お気づきになりにくいかもしれませんが、白根学園「ぶどうの実」の建物をよく見ると、薄紫色が葡萄の房、緑色が葉、黄色が枝を表しており、まるで利用者さんが葡萄の実として、今でも白根学園には創立期と同じように葡萄の木

が存在しています。ちなみに、「ぶどうの実」の由来としては、ぶどう寮と呼ばれていた経緯もありますが、併せて子供達には一人一人名前があり、人格を持った個人である事を世の中の人に伝えたい。葡萄の房のように一緒に暮らしていますが、一つ一つ違う実であり、大きさや味わいも違う子供達である事から、平成27年10月に名称を「ぶどうの実」に変更しました。

今回歴史を振り返ってみて、白根学園の敷地には葡萄と柿が長きに渡りある事が分かりました。手入れを毎年行った葡萄の木の寿命は100～120年程といわれています。初代理事長、これまで白根学園に従事してきた多くの職員、保護者の方、利用者さんのおかげで今の白根学園がある事に改めて気づきました。葡萄が大地から栄養分を吸収してみずみずしい真ん丸な実を結ぶように、白根学園もまた利用者さんが健やかに成長できるような施設であり続けられるように歩んでいきたいと思います。



職員エッセイ

「100%の感謝で電話を代わる」 希望：小山 修司

皆さん、仕事中に内線で「〇〇さんから電話です」とあったとき、どのように対応していますか？「はい」と言って先方と話し始めるのが一般的でしょう。私はそのとき「はい！ありがとうございます。代わって下さい！」と繋いでくれた人に100%の敬意を払ってから、先方と話すようにしています。事務職員が繋いでくれることが多いと思いますが、繋いでくれた方に「忙しい中、電話に出てくれて、私に繋いでくれて、ありがとう！」との気持ちで電話を代わるようにしています。事務職員は私達宛の電話対応で、様々な活動場所につなぎ、不在時には伝言を残すという作業を一日何十回も行っているのです。昔、私は営業サポートの業務で電話対応をしていました。「電話です」と同僚に伝えると「今忙しい、他の人に回して」と居留守を使う人、あからさまに電話に出るのが嫌そうな人もいて、嫌な気持ちになる事がありました。



少し話がそれましたが、私は事務の方は電話に出ることが仕事ではないと思っています。ただ支援員が「利用者対応で忙しいだろうな」という優しい気持ちであなたの代わりに外線に出ているとしたら、次にあなたが「電話です」と受けたとき、少し変わりませんか？

この場を借りて、事務職員は勿論、全世界の電話を繋いで頂いている方に感謝申し上げます。私は電話を繋いでくれた人に優しくありたいです。この瞬間から行える、電話をつないでくれた相手を少しだけ幸せにできるかもしれない戦略、「100%の感謝で電話に代わる」の話でした。

「ふく」

ホーム望：林 璃邑

ドラマみたいな出来事がありました。

少し前に、上大岡へ研修に行ったときに会った、ある女性とのお話です。滞りなく研修を終え、帰路につく前にひと休みと、本を片手に休憩スペースに腰かけました。2～3人がけのテーブルが10ほど並べてあったのですが、かなりの混雑状態。ゆっくり読書をしていると、大荷物を抱えた女性が、席を探すように視線をさまよわせながら歩いてくるのが、目の端にちらりと映りました。「よかったら、相席どうぞ」と迷わず声をかけると、「あら、ありがとうね」とその女性。80歳を超えているというその方と、テーブルを挟んで座り、30分程おしゃべりしました。初対面とは思えないほど会話が弾む中で、ひとつ「あれ？」と感ずることがありました。言葉を交わしている間、目は合っているのに、両手がずっとカバンの中で、ごそごそと動いているのです。探しものかと、あまり気に留めないようにしたのですが、やはりどこか引っかかりました。その違和感の正体が分かったのは、女性が帰り支度をしながら立ち上がったときです。「今日はあなたに“福”をもらったわ」と、そんなことを言うのです。続けて差し出されたのは、綺麗に“服”の形に折られた千円札。カバンの中で手を動かしていたのは、それを作っていたからだったのです。断りましたが、女性は「どうかお守りにして。あなたも誰かに“福”をもらったら、ぜひ返してあげてちょうだいね」とっこり。“服”を私の手に握らせて、背筋を伸ばして去っていきました。



“服”は、今でも財布の中に大切にしまっ
てあります。“福”をもらったなら、返す。とて
も素敵な考えではないでしょうか。日々
の生活では家族や友人から、仕事では利
用者さんや一緒に働く仲間から、色々な
形で“福”を受け取っています。どうやっ
たらその“福”を返せるかと、財布の“服”を見
る度、そっと周りの人たちに思いを巡ら
せるのです。

8P

まちがい探し の答え

※横になっています。



地域生活センター和^{なごみ}

地域生活センター和：安慶名^{あげな} 星花^{せいか}

「地域生活センター和」(略:和)はグループホームで生活されている障害を持った方のサポートをしています。和のグループホームは全部で18か所、男性47名女性38名、合計で85名の定員となっています。入所施設とは異なり、地域の中にあるアパートや一軒家などの住宅で、支援を受けながら障害を持った方が4~6人の少ない人数で生活されています。私たちは食事作りや入浴介助、夜間の見守り、病院受診や薬の管理、金銭管理等生活面全般の支援を行います。



和の利用者さんは、白根学園内の日中活動場所を利用している方もいれば、外部の日中活動先を利用している方、一般企業でお仕事をされている方もいます。様々な場所で日中過ごされているため、定期的にカンファレンスを行い、常にそれぞれの活動先との情報共有をしていくことも大切な支援の一つとなっています。

現在、和では高齢な利用者さんの対応が課題となっています。18か所すべてのホームがバリアフリーに対応しているわけではありません。高齢の利用者さんにとって現在のグループホームでの生活を続けることが本当に安全か、ご本人やご家族、ケアマネージャーや相談支援員と話し合いを重ね、グループホームから介護施設へ生活の場の移行を検討したり、現在のグループホームでの生活を継続するために訪問サービス(入浴介助やリハビリ、マッサージ等)の利用を検討します。和では訪問入浴、マッサージ、歯科、理美容等様々なサービスを活用しながらグループホームで生活されている利用者さんがいらっしやいます。利用者さんの地域生活を支えるために、多くの機関と連携して支援を行う事が和の役割でもあります。また、区役所関係書類の記入や障害支援区分の認定調査等、利用者さんが社会生活をするうえで大切な様々な手続きの支援を行っています。

和では、利用者さんのグループホームでの生活がより充実したものになるように、様々な余暇支援を行っています。通所先がお休みの日には外食をしたり、地域の防災訓練やお祭りなどのイベントに参加したり、ドライブや散歩を楽しんでいます。また、利用者さんの誕生日の月はホームで誕生日会や外食をして皆さんでお祝いをしたり、ハロウィンでは仮装を楽しんだり、クリスマス会や忘年会、お正月にちょっといいものを食べたり…日帰りや1泊2日で旅行へ行く事もあります。和で1番大きなイベントとして、年に1回、和パーティーという和の利用者さん

や職員全員が集まってお食事を楽しむ行事が行われています。利用者さんの「こんなことがしたい!こんなところへ行きたい!こんなものが食べたい!」という希望を少しでも多くかなえられるよう、様々な余暇支援を行っております。

私たち「地域生活センター和」は、グループホームがこれからも利用者さんにとって安心して帰ってこられる場所、安全に暮らせる場所であるように、また、利用者さんのニーズに沿ったその人らしい生活が送れるように、これからも日々考えながら支援をしていきたいと思っております。



和パーティーの様子

まちがい探し

この左右の絵の違いがわかるかな？

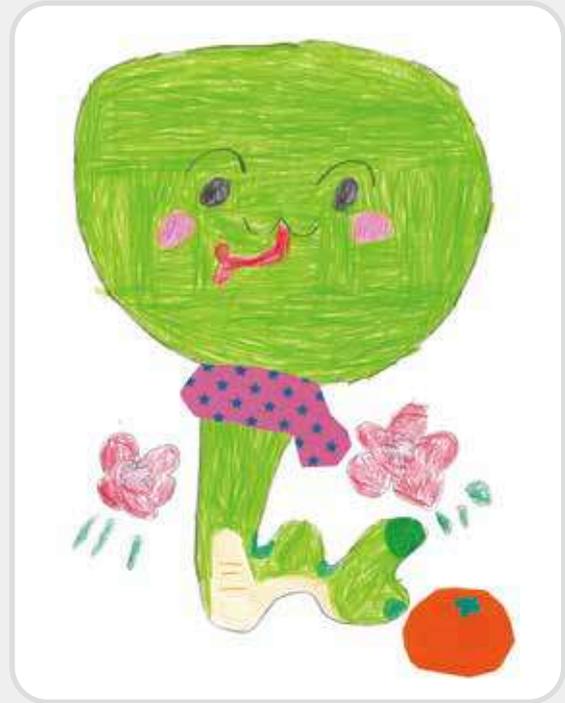
白根学園の利用者さんが作ったまちがい探しです。

5つの間違いがあるよ。

よく見ないとわからないから頑張って見つけてみよう。

答えは6ページにあるよ。

作：ぶどうの実 ゆずみ 竹石 唯純さん



編集後記

ホーム歩：中村 仁

今回の広報誌では白根学園感謝祭と白根学園に実っている果物を題材とした歴史を掲載しています。

感謝祭はコロナが5類移行後2回目の開催となり、少しずつですが地域の方々との交流が増えてきたことを実感しています。感謝祭に参加して毎回考えるのは社会福祉法人として、地域の中でどんな役割があるのか、地域で出来ることは何であろうかという事です。障害のあるなしに関わらず、地域の方達の交流拠点であればと感じながら毎回参加をしています。笑顔あふれた感謝祭を文章から感じていただければと思います。

また今回の歴史探訪では障害児入所施設である「ぶどうの実」の名前の由来を記事にしました。白根学園の歴史を違った角度から見ることが出来ると思います。今回も皆さまに楽しんで頂ければ幸いです。

